

完璧を目指して —日本での生活体験—

K・V・ラマスワミー

アジア経済研究所からの招聘状を受け取ったとき私は大変うれしくもあったが反面すこし不安になった。不安を感じた原因は配達人から受け取った大きな封筒にある。招聘状と諸々の書類はちよつと黒味がかつたクリーム色の封筒のなかに透明のビニールでできたフォルダーにはさまった形であった。それはきちんとした、そしてまったく非のうちどころがないような感じであった。一般的に仕事において完全でありかつシステムティックに行うということはなかなか私には思い浮かばないことである。

大学の経済学者でありながらも私は、時間の使い方や事務的なことを行うにつけても大いなる柔軟さをもって行つた。さらに、私は労働が有り余る国（インド）の出身であるから、ここ日本では自分でやらなければならぬ多くの仕事—例えば居間やトイレの掃除—はほかの人の手を借りて行つていた。日本での生活はおそらく違ったものになるだろうと思つていたのであるが、まさしくそのとおりとなつた。

飛行機に乗ったときからカルチャーショックは待ち受けていた。生の豆、にんじん、果物、レタスそしてご飯が昼食に出された。私がベジタリアンの料理を好むということあまりにも厳密に捉えた人がいたようだ。あとで日本人はベジタリアンについて違った考え方をしていることがわかつた。幸いにして家から食料もつてきていたのでひもじい思いをすることなくすんだ。入国管理手続きを済ませてからロビーに出てトイレに入った。私が入ったトイレは飛行機のコックピットのように、緑の電球あり、赤や黄色のボタンが並んでいた。複雑で混乱しそうなのでそのトイレは使わないことに決めた。トイレからでるともうひとつの衝撃がわたしを待ち構えていた。黄色の板をもつた中年の女性がわたしに会つても動揺する様子もなくわたしに近寄つてきた。幸いにもボードには英語がかかれていた。「床がぬれているのでご注意ください」と。わたしは、彼女がこれから床掃除をはじめると理解した。しかし床はすでにきれいにふかれていた。ほかになにを掃除するというのだ。ここでも日本人の完璧主義のもうひとつの実例に出会つた気がする。

電車の到着や発車時刻ももうひとつのおどろきである。常に正確に運行している。ラッシュアワリーのピーク時でさえ車内のひとが全部おられるまでプラットフォームで列を作つて待つ。かけていって席を占有したいという私の本能を抑えなければならぬ。日本人はわたしよりは一〇〇倍も忍耐力をもっている。優先席は高齢者、妊娠している女性、幼い子をつれたひとなどのための席であるが、そこを占領している人がいないのを見るのも気持ちのよいものだ。私のアパートは家具つきですべてのものがきちんと整

然と置かれている。エアコンや洗濯機もある。しかし使用説明書は日本語である。でもリモコンにはボタンのよこに小さな絵がついている。その絵を頼りにどのボタンがどの機能なのかを推測できる。洗濯機の乾燥ボタンの横には物干し綱にかかつたシャツの絵がついている。このような説明があると生活がとても快適になる。冬が近づき大きなセーターを着始め、頭には毛糸の帽子をかぶるようになった。自転車通勤も開始した。

私の前には半ズボンやミニスカートすがたの学校の生徒たちが道路を渡つていた。私の姿を頭のとっぺんから足の先まで見渡しておかしかつたに違いない。

日本人はほかの国のように *str* や *madame* のように区別して呼ぶのではなく、「さん」づけで呼ぶ。わたしはこの「さん」が好きである。というのも男女で区別をつけないからだ。富士山も *Mr.*さんとさんづけでよばれているではないか。

スーパーや大きなショッピングモールに行くのも楽しい経験である。買う予定の品が安い品であっても店員さんはその商品の棚まで連れて行つてくれるほど親切だ。

日本人の性格がすごいなと思うのは、顧客へのサービスを第一に考えたり企画を練つたりする点、そして設備などを顧客フレンドリーなものに設計している点である。

おどろくのはみんなさりげなく、でも完璧にやっている点である。これは外国人がどうやってもまねすることのできない重要な特質なのである。

K. V. Ramaswamy / アジア経済研究所海外客員研究員

インド、インディラガンディー開発研究所教授。
アジ研での研究テーマ：Understanding the “missing middle” and Employment Dynamics in Indian Manufacturing: A Study of Formal Sector Manufacturing in India